



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2008年12月
第 71 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩 (10) (岡田健嗣)	1
点字から識字までの距離 (67) (山内 薫)	7
酔夢亭日記 (28) (酔夢亭)	9
漢字の歴史と「説文解字」	10
見果てぬ夢を (14) (山本優子)	14
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子)	17
東京漢点字学習会報告 (菅野良之)	21
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト(初級編・第12回)	27
ご報告とご案内	29
編集後記 (木下和久)	31

漢点字の散歩（十）

岡田 健嗣



今回から〈点字〉の構成を今一步踏み込んで考えます。〈点字〉をご存じない皆様も、点字をパターンとしてお受け止めいただければ充分です。点字で何が書かれているかを読み取る必要はありません。

五 英語点字（一）

端書き

二〇〇〇年の五月に、即席に組まれた「盲教育に漢点字を導入する会」という団体が、これも前年に急遽実施した署名運動の結果を持って、文部省（現・文部科学省）を訪れて、「視覚障害児・者の教育現場で、〈漢点字〉を取り上げて、視覚障害者の識字を図って欲しい」旨の陳情を行った。私も微力ながら、多くの皆様のお力を頼りに、署名の活動に参加した。お陰様で五万人に達しようという署名が集まり、即席の組織の活動とは言え、大いに盛り上がったものである。快く署名に応じて下さった皆様には、この紙面をお借り

して、厚く御礼申し上げたい。残念ながらその会は、継続性を持ち得ずに、現在は活動を休止している。呼びかけに応えてご署名下さった皆様には、その意味で、誠に責任を果たせぬままとなっている。関係者の一人として、極めて遺憾なこととお詫び申し上げます。

当日文部省をお訪ねしてお会いしたのは、中曽根文部大臣（現・外務大臣）、河村文部政務次官（現・内閣官房長官）である。そして障害者の教育行政の責任者である審議官と課長にお話をお聞きいただく機会を得た。

具体的にお話をお聞きいただいたのは、審議官と課長のお二人だった。当方は十名余り、それぞれに盲教育を受けて来た過程と社会経験から、識字教育を受けられなかった状況と、それが社会生活に及ぼす影響を述べた。また視覚障害者にとつての文字が、レイ・ブライユ以来、触覚に訴える〈点字〉であることと、唯一触読に適する〈点字〉の漢字体系は、川上泰一先生の創案された〈漢点字〉であることをご紹介し、我が国の視覚障害者の識字教育には、この〈漢点字〉が欠かせないものであることをお話した。

当方の請願に対する文部行政からの答えは、以下の二点であった。

①現在盲教育の現場では、以前と異なつて、漢字教

ルイ・ブライユの点字表

1 :	1 Aa	2 Bb	3 Cc	4 Dd	5 Ee	6 Ff	7 Gg	8 Hh	9 Ii	10 Jj	Upper4
2 :	11 Kk	12 Ll	13 Mm	14 Nn	15 Oo	16 Pp	17 Qq	18 Rr	19 Ss	20 Tt	+ 23
3 :	21 Uu	22 Vv	23 Xx	24 Yy	25 Zz	26 and	27 for	28 of	29 the	30 with	+ 23
4 :	31 ch	32 gh	33 sh	34 th	35 wh	36 ed	37 er	38 ou	39 ow	40 Ww	+ 23
5 :	41 ,	42 ;	43 :	44 .	45 en	46 !	47 ()	48 ?	49 in	50 ”	Lower4
6 :	51 st	52 ing	53 brl	54 ar	55 ,	56 -					
7 :	57	58	59	60	61	62	63				

育を行っていないわけではない。それぞれの現場で、先生方が知恵を絞って試みている最中である。

② 漢字教育も大事だが、子どもたちには、教育課程で身につけなければいけないことが沢山ある。漢字教育ばかりに力を注いではいけない。

そこでこの二つの点を掘り下げて見た。当方の質問をQ、文部省のお答えをAとして詳述する。

Q…現在盲学校で行われている漢字教育の概要はどんなものか？

A…現場では、点字プリンターやレザライタ―その他を使って、漢字の浮き出し文字を作って、漢字の形と音訓を教えているようだ。

Q…点字で漢字を教えようという試みはあるか？

A…かつて筑波大付属盲学校の長谷川貞夫先生が試みたが、子どもたちには過重であることが分かったとして、(二〇〇〇年)現在、教科としては教えていない。

Q…(漢点字)を教えているところ

はないか？

A…教科で取り上げることはないようだ。課外で教えているかもしれないが、把握していない。

Q…〈点字〉をどう評価しているか？

A…視覚障害者の文字としては、〈点字〉が最も適した文字であることは間違いない。従って盲学校では、基本的に〈点字〉を使って教育している。

Q…現在行われている〈点字〉の教育は、従来の「カナ点字」だと思うが？

A…そのとおりである。

Q…〈点字〉を使つての教育は、「カナ点字」の教育だけで充分と考えておられるのか？

A…もちろんそうではない。従つて漢字の教育も試みている。

Q…〈点字〉での漢字の教育は、行つておられない？

A…長谷川先生が「無理」と判断された経緯がある。

Q…長谷川先生は、ご自身の提唱されている「六点漢字」をお使いになつたのであつて、〈漢点字〉を試みたのではないのか？

A…どちらも似たようなものではないのか？長谷川先生が「無理」と言われるのだから、〈漢点字〉も「無理」と判断されると思う。

Q…長谷川先生のご判断を是とされるのか？

A…：

Q…他の教科も大事なので、〈漢点字〉を教える余裕がないと言われたが、国語教育より大事な教科があるのか？

A…たとえば英語の勉強では、「略字」を学ばなければならぬ。これは点字で学習する生徒だけに課せられた勉強で、普通校の生徒はしなくてよいものである。これは生徒にとって大変な負担と言えないだろうか。

このようなやり取りの後お二人は、①子どもたちの学習負担はこれ以上増やせない。②〈漢点字〉と「六点漢字」という、点字の漢字の二つの体系が並立しては、行政としては何もできない。当事者がよく話し合う必要があるのではないかと結論付けられた。ここで私は誠に不謹慎ではあったが、つい吹き出してしまった。というのは、「英語点字の略字を学ぶのは学習負担になる」などというのを聞いたのは、初めてだったからである。「略字を学んで英語が分かり易くなった」というなら実に分かり易いのだが、：

もう一つ、当方は一度として「点字の漢字体系には二通りある」などと言ったことはない。長谷川氏がそのように言つて、現在そのように流布されているだけ

である。この件はこれまでも繰り返し述べて来たことだが、さらに項を改めて幾度も繰り返し述べる必要がある。

今回は英語点字の「略字」が、如何に英語の習得に力を与えているかを考えて見る。

アルファベット

冒頭(二ページに掲載)に掲げたのは、お馴染みのルイ・ブライユの点字一覽である。これまではアルファベットだけ示したが、今回は句読符号と一マスの略字をも示した。

アルファベットが二六文字であることは自明であるが、どのような経緯で二六文字に定まったか、誠に不勉強な私には詳らかにしない。しかしこの二六文字を以て表されるのは、どうやら英語だけのように見える。フランス語やドイツ語の表記には、変音記号やアクセント記号が付加されるし、さらにドイツ語にはszを一文で表す文字が使用される。ギリシア語のアルファベットは α (アルファ)から ω (オメガ)まで二四文字、ロシア語は、キリル文字を基にして作られたロシア文字三三文字で表されるといふ。こうして見ると、アルファベットを二六文字と規定しているのは英語だと言ってもよいように思われて来る。しかも「英語点字」から(点字)のアルファベットを考えると

き、さらにその感を強くした。

例によって『広辞苑』で幾つか調べて見た。

《アルファベット【ALPHABET】》

ある言語を書くのに用いる、一定の順序に並べられた文字の総体。ABCD…など。普通には現在のローマ字をいう。もと、ギリシア文字の初めの二字 α (アルファ)と β (ベータ)とを合せて呼んだことに基づく。≪(『広辞苑』第四版・電子ブック版、岩波書店)

この概念を敷衍すれば、日本語の音を表すカナ文字を規則的に並べたものの、五十音やいろはを「アルファベット」と呼ぶこともできそうに思える。

《【字母】》

仮名・梵字・ローマ字など、音を表記する母体となる字。≪(同右)(以下同)

「字母」は、音を表す文字の総称である。この「字母」にも「音素」と「音節」の二種ある。

《【音素】》

【言】(phoneme) ある一つの言語で用いる音を弁別機能の見地から分析・規定した最小単位。分節音素(子音・母音)と、かぶせ(韻律)音素(アクセン

トなど)に分ける。フランス言語学では、前者を扱う部門を音素論 (phonématique)、後者を扱う部門を韻律論 (prosodie) とする。アメリカ構造言語学では、両者を一括して音素論 (phonemics) と扱う。》

「音素」とは、音韻と韻律にまたがる概念とある。しかし一般的には、「分節音素」と呼ばれる音の最小単位「子音」と「母音」と解してよいようだ。すなわち「音素」とは、「子音」と「母音」のことである。

《【子音】

〔言〕 (consonant) 単音の分類の一。口腔または喉頭に閉鎖または狭窄が形成されて生ずる音。声帯の振動を伴うものを有聲子音、伴わないものを無聲子音という。》

《【母音】

〔言〕 (vowel) 単音の分類の一。声帯の振動による声を伴う呼吸が口腔で通路を妨げられず、したがって噪音(そうおん)をほとんど伴わずに発せられる音。口の開き、舌の位置などの相違によって音色の相違を生ずる。現代日本語ではア・イ・ウ・エ・オの五つ。》

分かりきっているようなことでも、説明すればこんな風になるという例である。実にややこしい。

そして、

《【音素文字】

一字で一音素を表す表音文字。ローマ字や朝鮮語のハングルなど。》

アルファベットは、子音と母音をそれぞれに表す「音素文字」なのである。

《【音節】

〔言〕 (syllable) 語の構成要素としての音の単位で、一つのまとまった音の感じを与えるもの。ふつう、核となる母音の前後に子音が添って、開口度が小↓大↓小と移行する。》

ますます分かり難い。碎いて言えば、「一音節とは、一つの母音を含む子音と母音の集まり」。子音は幾つあってもかまわない。母音が一つあれば一音節、二つあれば二音節と数える音の単位、と解する。これは「音素」に対抗する概念とも言える。

《【音節文字】

一字で一音節を表す表音文字。わが国の仮名文字など。》

以上、「音素」と「音節」と、それを表す文字について抽出した。

ここでは追わないが、「音節」にはさらに二つの概念が続く。

《【開音節】

[言] (open syllable) 母音または二重母音で終る音節。》

《【閉音節】

[言] (closed syllable) 子音で終る音節。》

この二つの概念は、音声言語を考えると、極めて重要な位置を占めるはずだ。だがさし当たりここに残しておく。

以上『広辞苑』を引きながらくどくどと述べて来たが、私たちが中学から英語を学んで来た中で形成されて来たアルファベットの概念が、「英語点字」の理解を通して、別の姿を見せて来そうだ、ということをや、予め申し述べておきたかったのである。

英語点字と拡張アルファベット

〈点字〉は一八二五年、ルイ・ブライユが創出した「触読文字」である。しかし彼の存命中には世に認められなかった。

当初の〈点字〉は、アルファベットをそのまま点字符号に置き換えたものだった。それでもそれまでの墨

字のアルファベットを浮き出させたものに比べれば、遥かに読み易いものであった。

彼の没後、彼を慕う人たちが立ち上がって、欧州各国に〈点字〉を伝えることに努めた。その結果として〈点字〉が、アルファベットを表す符号であることが広まって、欧州各国語がそのまま表記できることが知れ渡った。

しかし人の欲は次のステップを求めた。「もっと読み易い〈点字〉が欲しい」。

確かに〈点字〉は、触読に適した文字である。が何かが足りない。「そうだ、朗読ができない」。欧州の文学の習慣には、「朗読」が欠かせない。「朗読のできる〈点字〉が欲しい」。

ブライユの〈点字〉はアルファベットである。触読しながら音声にすると、ひどく間延びしたものになってしまうのであった。どうすれば「朗読」できるか、単に練習だけでは果たせないことが分かって来た。

そこで人々は、研究し工夫を加えた。

英語について見てみたい。

アルファベットは音素（子音と母音）を表す二六文字の一並びである。その中には a・e・i・o・u という五つの母音と、二一個の子音が含まれる。

(続く)

点字から識字までの距離(六七)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

「漢字批判」批判

先日、新しく図書館を利用して下さる視覚障害者のお宅へ点訳希望のパンフレット(CDの解説)を取りに伺った。その方は生来全盲で、小・中・高と盲学校に通われ、大学は一般の大学で学ばれた方だ。いろいろお話しを伺う中でとても印象に残ったのは、盲学校の教育はほとんどが晴眼者の発想や感じ方で行われている、触覚を主体とした視覚障害者の発想や物の捉え方が欠落しているという話だった。晴眼者は視覚文化圏に生きているが、視覚障害者は触覚文化圏に生きているという側面をもっと教育の中でも取り入れるべきだと話されていた。その話を聞いて、すぐに思い浮かべたのは、丁度今までの聾学校において聴者の発想で教育が行われてきたために、手話言語が否定され、口話法が取り入れられてきたことだった。学校という組織の中で目の見えない、あるいは耳の聞こえない当事者の発想や考えが無視されてきたことは「点字」と「漢字」の問題にも当てはまるのではないかと思わずにはいられない。

この連載では、三号にわたって様々な漢字批判を紹

介してきたが、その根底には、日本語の表記に仮名やアルファベットを採用して表音文字を使用することが望ましいという発想がある。戦後一九四六年に告示された当用漢字は、「当面用いられる漢字」であって、将来的には漢字をなくすという含みがあつたようである。しかし、結局は漢字の廃止には至らず、一九八一年に常用漢字が告示されたことよって「当用漢字」という考え方は廃止されたのだった。日本語の表記を表音にしようという考え方の背景には、言語というものは音声言語Ⅱ話された言葉であるという思いこみがある。あべ氏が引用した文章、「わたし自信は性格にはわからないのだが、わたしの正確はのんびりしているそうだ。大將的に彼はせっかちで、いくら中位しても効かない蛍光がある」は、確かに音声言語を日常使用している人には、音に変えればある程度理解出来るかもしれない。しかし、例えば日本手話を第一言語としている人にとつては、おそらく全く意味の取れない文章になってしまうだろう。また、あべ氏が別の論文で漢字弱者として取り上げているディスレクシア(読字障害)の人にとつても意味の取れない文章になってしまう可能性がある。わたしの知っているディスレクシアの方は、同席した会議で、配布された文書を読むときにお弁当の箸袋を読むべき行の下に当てがい、右手の人差し指と中指を開いた空間に見える何文字かを

判読しながら書類を読んでいく。その方にとっては仮名だけの文章はかえって読みにくいものであり、漢字表記が読むことを助けているのだが、おそらく上記のような誤った漢字を使った文章は非常に理解困難であろうと思われる。「漢字は難しく仮名はやさしい」とは一概に言えることではなく漢字に助けられて読むことができる人も多く存在するのである。

そもそも「話し言葉」と「書き言葉」は異なるものではないだろうか。現在の日本は標準的な日本語によつて書かれた教科書を用いた学校教育が普及し、テレビ、ラジオから流れてくる日本語は全国どこで耳にしても同じなので、すべての日本人が同じ言葉を話しているような錯覚を持ちかねないが、例えば青森県の方言を表音で表したものを鹿児島県の人が理解出来るかどうかは怪しいと言わねばならない。ニュースを伝えたり、考え方や意志を伝えるために、教科書や新聞という共通の日本語で書かれた書き言葉が必要とされるのである。漢字の本場中国でも、地域で話される言葉はそれぞれに全く違うにもかかわらず、漢字という統一した文字があるお陰でお互いの考えを伝えあうことができるのだ。

どのように書くか、漢字を書くか書かないかは全く個人の自由にゆだねられているが、書かれた漢字を読むことに關しては、漢字を学んでいるか、いないかで大きく変わってきてしまう。あべ氏が言う漢字が障害

になっている、というその障害はすべての漢字に振り仮名をつけることで、ほとんど解決出来る問題ではないかと思う。漢字をなくすことを目指すよりも漢字にはすべて振り仮名をつけることを目指す方がよほど意味があり現実的ではないだろうか。（墨田区立図書館の図書館利用に障害のある人へのサービスの利用案内は絵文字を使用すると同時に使われている漢字にはすべて振り仮名を振っている。）

さて、はじめの「盲学校の教育はほとんどが晴眼者の発想や感じ方で行われている」という問題に立ち返ってみて、それなら何故晴眼者が当たり前のように入用している漢字（漢点字）を盲学校で採用して教えないのかと疑問に思う。よく二つの漢字を表す点字が併存していることがその理由のように言われるが、本当の理由は、教える側にとって漢点字を憶えるのが難しく教えるのが困難だから、あるいは単にめんどくさいからなのではないかと勘ぐってしまう。誰が盲人には漢字はいらないと判断しているのだろうか。漢字を権威であると言ったり、視覚障害者は漢字弱者であるというのはそれこそ晴眼者の発想ではないだろうか。漢字を学びたい、漢字仮名交じりの文章を点字で読みたい書きたいという点字使用者の意向を全く無視している盲教育界、そして社会こそ権威にあぐらをかいて点字使用者を差別している元凶であると思わずにはおれない。

酔夢亭読書記(第28回)

酔夢亭

某月某日。



日本では小林多喜二「蟹工船」、ドイツではマルクス「資本論」が売れているというところで、いよいよ虐げられたプロレタリアートが連帯決起し、厚生労働省あたりに丸太ん棒抱えて突撃でもするものと思いきや、そんなことは起らない。孤立した個人が痙攣症状を起こしているようにみえる社会的事件が頻発するのみだ。

現代の進化を遂げた労働者たちはひたすら耐えることを選んでいるようである。先行きの生活不安等に打ちひしがれ、心身を酷使しているせいか出勤前に疲労回復のための点滴を受けるのが昨今の「労働者」のトレンドである、朝のNHKニュースで報じていたりする。確かに巷には疲労困憊している人々、大衆、人民、庶民、貧民、があまりに多すぎる。

労働者を雇用する企業がなりふり構わない自己防衛をはかり、姑息な雇用形態を取っていることもボディーブローのように効いてきている。ボーとしている人間や能力が不足していても養っておくことができるくら

いの余力はかつての会社にはあったような気がする。

二世三世の宰相が「国の権威」という幻想さえも失墜させ、有能であると思われてきた官僚たちの能力もさほどのことでもなかったと世間に知れ渡ったとき、疲労感はずます募るばかりだ。

何はなくても楽しい我家、今は貧乏でも努力すれば明日の希望がみえてくる、そんな時代ははるか彼方に過ぎ去って、国も個人も借金まみれになってしまった。子どもの小遣い程度の給付金で現状打破できると本気に政治家が考えているとしたら、マンガ好きを通り越してマンガそのものではないか。

「日本の借金時計」によれば、現在の日本の借金は800兆円を超す額となっていて常識的に考えれば、破産状態である。国が破産したらどうなるかはちよつと想像できないが、幕末から明治にかけての頃と、太平洋戦争終結後の混乱状況を考えてみれば良いのかもしれない。どちらの時代をも経験した人は多分あまりいないようであるから、歴史認識の問題になつてくる。

参考文献

「貧民の帝都」 塩見鮮一郎（文春新書）

『「お金」崩壊』 青木秀和（集英社新書）

以下次号

漢字の歴史と「説文解字」

《常用字解》漢点字版の前半の完成が近くなりました。今回は、白川静先生が書き下ろされて、同書の最後部に収録されている「漢字の歴史と「説文解字」」の前半部をご紹介します。ご精読下さい。

一 甲骨文字と金文

漢字が生まれたのは、今からほぼ三千三百年前、殷王朝の武丁（王の名）のころのことであった。当時の殷王朝の都であった河南省の北端に近い安陽市西北部の小屯の地で、地下深くに多くの殷王の墓室が発見され、その付近から、王室が占いに用いていた亀甲と獣骨が鄭重に埋められているのが発見された。亀甲は亀の腹の甲、獣骨は獣の骨、主として牛の肩胛骨で、そこにはトイに関して字が刻まれている。その文字を甲骨文字という。この甲骨文字が中国における最古の文字であり、漢字の最初の形である。甲骨文字は亀の甲羅や獣骨のような硬いものに、鋭い刃物で刻みつけたものであるから線刻の文字である。この地下

に埋まっていた甲骨文字が発見され、その存在が知られるようになったのは一八九九年である。

小屯の殷王の墓からは、またすぐれた多数の青銅器が出土した。ことに武丁の妃とされる婦好の墓（一九七六年発掘）は、他の王墓がほとんど盗掘を受けているにもかかわらず、幸いに盗掘を免かれて、埋葬当時のままの姿で残されていた唯一の墓室である。婦好墓出土の二〇〇点余りの青銅器には、「婦好」などの簡単な銘が加えられている。その後次第に青銅器の作器の由来をしるす銘文が鑄込まれた器が作られ、殷末の青銅器には、ときに数十字に及ぶ銘文を持つものがある。青銅器に鑄込まれた文字を金文という。

紀元前一〇八八年前の殷周革命（殷王朝から周王朝への交替）ののち、西周期（およそ紀元前一〇八八年前七七〇年）に入ると、殷周革命の後の経営に関する記述をもつ銘文もあり、時にはその文がおよそ五〇〇字に及ぶこともある。金文は青銅器ができあがってから刻みこまれたものではなく、青銅器を鑄造する過程で、青銅器の鑄型に銘文用の鑄型を、主として青銅器の内壁に取りつけて鑄造してできた文字である。したがって、直線を多く使った線刻の甲骨文字とは異なっており、柔らかな曲線の文字が多く、その線も肉太の線である。

ほとんど文献が残されていない時代のことであるから、これらの甲骨文や金文は、当時の事情を考えることのできる貴重な同時資料である。

甲骨文に用いられている文字の数はほぼ五〇〇〇字。そのうち後にまで使用されていて、解読することができる文字の数は、ほぼ二〇〇〇字である。

金文に用いられている字数はほぼ四〇〇〇字。そのうち後にまで使用されていて、解読することができる文字の数は、約二〇〇〇字である。

甲骨文字・金文には象形の字が多く、字形の示す意味を理解することができると多い。また、文字の形を理解することによって、当時の生活や文化のありかたを考えることができる。

甲骨文字と金文は、字形や文字の構造の上では大差がなく、漢字の原形を示している古い字として、基本的に同類の字として扱うことができる。漢字の形とその意味との関係を理解し、漢字の



甲骨文字の「王」



金文の「王」

成り立ちを知るためには、甲骨文字と金文とを基本の資料としなければならない。

二 籀文・古文・篆文

西周期の次の春秋期（紀元前七七〇年～前四〇三年）になると、諸侯各国が地域的に分裂・割拠して、漢字の統一性が失われ、北方の中山国、東南地方の呉・越のように、独自の様式の字が使用されるようになった。字形も変化し、複雑な字形と簡略な字形との差も著しくなつて、その簡略化した文字は、六国古文という。

西方から興つて、紀元前二二一年に六国を統一した秦は、もとの西周の地に入つてその地を根拠とし、その地の文化を継承した。それで秦の初期の遺品とみられる石鼓文（鼓形の石に刻まれた文。今はおよそ四〇〇字余りの文字が残っている）には、西周後期の金文の文字の字様が残されている。秦は天下を統一すると、六国の古文を廃止し、秦の地に残されていた字様



石鼓文

の篆文（小篆ともいう）を統一の文字とした。その字は西周後期の美しい線状の文字、すなわち篆意の強い文字であるので篆文という。申の字の変遷でわかるように、石鼓文にみられるような画数の多い繁体の字を籀文（ちゆうぶん、大篆ともいう）、六国の簡略化して本来の字形を失ったものを古文という。そして呉・越のように、文字の筆画の先端に鳥や虫の形などを装飾的に加えたものを鳥虫書という。

後漢の許慎が紀元一〇〇年に著した「説文解字」は、篆文を主とし、参考として籀文・古文の字形を収めている。許慎が「説文解字」を著したとき、甲骨文



秦代の篆文



鳥虫書

字や青銅器は出土しておらず、許慎は漢字の最も古い形の甲骨文字と金文を知ることがなかった。篆文・籀文・古文には、たとえば彝の字のように、すでに文字の原形を失っているものが多いのである。



三 簡冊の字・隸書

甲骨文字・金文のほかに、今も残されている古い文字資料としては、玉書、竹簡・木簡の類がある。

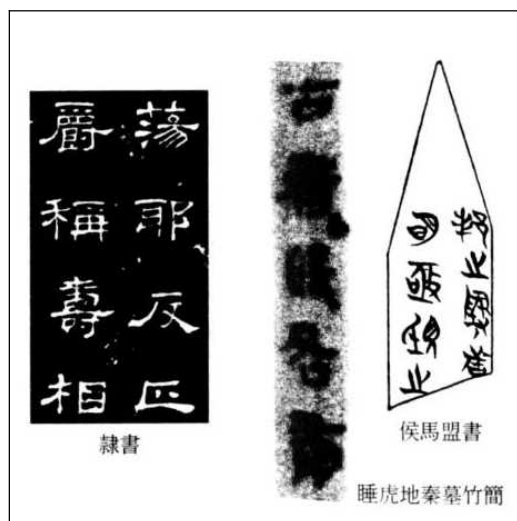
玉書（玉に書かれた書）には、一九六五年にもと晋の都が置かれていた山西省侯馬市から発掘された侯馬盟書がある。春秋期の大国の一つであった晋が、趙・魏・韓の三国に分裂しようとする際に、趙の宗族が一致して行動する盟約を、平たくて先が尖った玉に朱で書いたものが数百点発見され、侯馬盟書とよばれている。

竹簡（文字を書くための竹の札）に書かれたものは、秦の法令の類を記した睡虎地秦墓竹簡とよばれるものが約千箇条ほど出土している。これらのものは筆で竹の札に直接書いたもので、筆記体として簡略な字形で書かれており、同じ字であっても筆画が少しずつ相違するなど、かなり自由に記されている。その文字はだいたい古文の系統に属するものとみてよい。

木簡（文字を書くための木の札）は竹簡よりも札の幅が広く、また運筆しやすいこともあって、筆意を示しやすく、書としての美的な感覚を求めることができる。それで筆のさばきを生かして、抑えや撥ねの美しさを求める書体が生まれた。篆文は字の構造が複雑で

曲線的な字であるが、隸書は直線的であり、かつその線のさばきを主とするもので、後の書法の原点となった。漢・魏の時代（紀元前二世紀～紀元三世紀）の石刻の書には、この隸書のものが多い。隸書の筆端のさばきをやめて、筆端を収めたものが楷書、筆さばきを速めたものが行書・草書となる。

文字の構造を考える上では、甲骨文字・金文を第一とし、籀文・古文を補助資料として考えるのがよい。許慎の「説文解字」は、篆文を主として字形の解釈を試みたものである。



見果てぬ夢を（十四）

山 本 優 子

十三 あけぼの（承前）



さらに六光社は、「あけぼの」の印刷とともに、訓盲院で必要な点字教科書や各種刊行物にも取り組んだ。当時出版した主なものである。

『盲人点字独習書』（左近允孝之進著）

『わが生涯』（ヘレン・ケラー著）

『日英の盲人』（好本督著）

『作文の参考書 上下二巻』

『四福音書』

『百人一首解釈』

『日本外史論文集』

『杉山流奥義書』

『初歩的な鍼按医書』

岐阜訓盲院の委託による同窓会誌「星かげ」

また、当時、青少年の独習書として評判の高かった早稲田中学講義録を明治三十九年春から継続出版することも決定した。これは二年間に渡って出版され、全

国の盲青年を大いに啓発することとなった。このように明治三十八年は大きなできごとが続き、その功績が、文部大臣と兵庫県知事からも認められ表彰された。

孝之進の知名度が高まり、六光社の出版物は、どれも大好評となっていた一方で、訓盲院と六光社は、早くも危機に直面した。「あけぼの」頒布対象の大半は富裕な階層ではなかった。購読料を払わない人たちが多かった。購読料を確実に徴収すべきとの関係者の声が再三出されたが、孝之進は、

「払える人たちには購読料を課さなくてはならないが、経済的に困難な人たちをこそ第一の読者対象としたい」

と、購読料を払わない人たちにも無料で送り続けることを主張した。

当然販売利潤は上がらない。採算が取れない六光社は、ただでさえ窮屈な訓盲院の財政負担を逼迫するようになった。関係者からは学校と六光社を分離するよう、たびたび意見が出された。が、孝之進は、

「学校も大事だが、盲人の向上にとって新聞書籍の供給こそ急務」という考えを曲げなかった。

一方、当時の盲児たちは生業習得のために師匠の家に弟子入りするものが多かったが、訓盲院にもその感覚で入学を希望する者たちが押しかけ、院生は急に増

えていった。大半が食事也十分に摂れないような貧しい家庭の子供たちだった。関係者は、これ以上生徒を増やすのは不可能だと訴えた。が、孝之進は頑として言った。

「勉強したいのにできず悔しい思いを重ねてきた者達がようやくここにたどりついたのだ。我々の食べるものなどを切り詰めれば、この子達に勉強させてやれる」

それにしても、あまりに手狭で、どうにもならない。盲児が、怪我をする危険もある。孝之進は、経済的見通しが立たない中、必要なものは必ず与えられると信じて、山本通^{やまもとどおり}に分院を設置した。一九〇七年（明治四十年）のことである。場所の余裕ができて、希望者はすべて院で学ぶことが許された。構内でひしめきあうこともなくなつたと院生たちは喜んだ。

が、それもつかの間だった。あまりにも逼迫してきた経済状況は、分院の継続を不可能にしたのだ。

分院は翌年閉鎖に追い込まれ、約四十名の院生はもとの訓盲院校舎に押し込まれることになった。孝之進たちの寝室も事務所も教室に充てるといふ状況になった。それでも、孝之進は貧困盲児に衣類と食事を給付して学びを続けさせようとした。当然給付生がどんどん増え、まったく採算の合わない経営状態は悪化する一方であつた。就学義務や補助金のなかつた当時のこ

とである。そこまでも長続きせず、学びたい気持ちを抑えて退学していく院生が出てくる。そのたびに孝之進は深い痛みを覚えた。関係者は、人気のないところで涙を流しながら祈りあっている孝之進と増江の姿を目撃することがあつた。

さらに、そのころから孝之進自身がどんどん痩せ、明らかに健康状態が悪くなつていった。増江は毎日のように言つた。

「コウさん、これ以上無理ですよ。倒れてしまったら、どうしますか？」

孝之進は答えるのだった。

「主が与えてくださった使命を終えるまでは、倒れないよ」

増江は、孝之進の気持ちをくじくよりも、助けが与えられることを祈つて進むべきだと悟るようになった。

院生たちが、むしろ、

「先生の手に触れたら、熱がありはるみたいです。休んでください」

「先生の肩、揉ませてもらうて、びっくりしました。こんなに痩せはつて……、過労やないですか」

と、心配を孝之進夫婦にぶつけた。中でも一番弟子のようにかわいがられていた加藤儀平は、孝之進に休息をとらせようとがんばつたが、孝之進は「ありがと

うな」と、言うだけで仕事を減らそうとはしなかった。

一九〇六年（明治三十九年）の夏ごろ孝之進が何気ないように儀平に、

「のどに肉ができた」と医者が言ったよ」

と、言ったことが儀平の心に痛みを伴って焼きついた。

（あの時、何とかして先生に療養していただくようにできなかったのか……）

と、儀平は後に悔やんだ。

十四 出合い

経済状況、健康状態が思わしくない中でも、この時期、孝之進は対外的な働きに次々と呼ばれるようになっていた。講演や会合で、岡山に、京都に、伊勢に、岐阜に、東京にと、孝之進は日程をやりくりして増江と共に訪れた。行った先々で、各地の盲学校先覚者たち、教師たちとの出合いがあり、孝之進と増江は大いに勇気づけられた。

東京盲哑学校（現筑波大学付属盲学校）での「日本盲教育会」発足準備がきっかけで出会った当時岐阜訓盲院院長だった森巻耳（もり けんじ）から受けた影響は大きかった。森巻耳と孝之進は、聖書から人生の

意味を見いださせ、幅広い教養を身につけさせることに重点をおいた訓盲院を目指すという立場から意気投合した。

森巻耳は一八五五年（安政二年）加賀藩土坂井洗耳（さかい せんじ）の次男として金沢に生まれた。幼少のころから武術をたしなみ、同時に学問に志し、一八七一年（明治四年）金沢藩東校で初級教師に任命された。以来当時の日本を代表する教師陣に囲まれて国際人としても教育に打ち込むようになった。

一八八七年（明治二十年）には、英語教師として岐阜へ来住、さらに同二十一年には文部省より博物動物科中学教員の免許が与えられると同時に教諭に任命された。ところが、このころ悪性の眼病にかかり、二十一年六月、中学教員を辞職した。以前からキリスト教に深い関心を持ち熱心に求道していた巻耳は、退職した直後の六月十七日、信仰告白して洗礼を受けた。以後キリスト教信仰に立つての盲教育を志し一八九四年（明治二十七年）三月、イギリス人宣教師 A・F・チャペルとともに「岐阜聖公会訓盲院」を開設した。それは「岐阜訓盲院」となり、巻耳は校長として手腕を発揮するようになった。孝之進が兵庫で訓盲院を開設したことを知った巻耳は近畿地方を訪れた際、「日本盲教育会」発足準備の話し合いという目的もあつて、孝

之進夫婦を訪ねた。巻耳と孝之進は、時が過ぎるのを忘れて語り合い、盲教育の今後をめぐって祈りあった。以来巻耳は若い孝之進に岐阜で講演するよう依頼したり、折あるごとに孝之進を励ましたりするようになった。

岐阜訓盲院の同窓会誌を六光社に依頼したのも、巻耳だった。一九〇一年（明治三十四年）に「岐阜訓盲院同窓会」が発足した時、巻耳は同窓会誌発行を思いたち、それを「星かげ」と命名した。当初はすべてを在校会員が手分けして手書きしていた。それを六光社が印刷することで、孝之進の中には神戸訓盲院を卒業した者たちの将来像がイメージされるようになった。孝之進は巻耳のことを主が導いてくださった手本として尊敬してやまなかった。巻耳の方も自分より十五歳ほど年下の孝之進を敬い、活躍を期待していたのだった。

さらに、巻耳の紹介で孝之進は、日本の盲人界に欠かすことのできない働きを遺した好本督（よしもとただす）とも出会った。好本との交わりは、孝之進の夢を一段と膨らませた。孝之進より八歳ほど若かった好本にとっても、孝之進から受けた影響は計り知れない。好本の九十四年間の生涯での数々の働きの突破口の一つは、孝之進との出会いであったと言ってよい。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第35回例会 2008年10月8日（水）、13…30

15…30、ヒューマンプラザ第1会議室

NHKの第20回「若葉基金（リサイクルパソコン貸与部門は第2回目）」から頂いたノートパソコンは3台であるが、やや重いので持ち運びが少し大変だが贅沢は言えない。

「神様がくれた漢字たち」の完成である。点字印刷は今のところはしないで、EIBファイルで分けて頂いた。もちろんこれはデータが壊れないことが一番安心な理由であるが、著作権も保護されるという大きな利点がある。

新しい本の入力をお願いした。即座に各自に割り当てられた。この本にも表記の問題が出そうである。

第36回例会 2008年11月12日（水）、13…30

15…30、ヒューマンプラザ第1会議室

新しく入力していただき始めた本の記号について確認した。

字式を持つて漢字をどこまで説明できるかクイズ風にやって皆さんおもしろがっていた。

今年は忘年会をしようではないかと、何となく声が上がりが始めたので、11月の学習会のときに、学習会の皆様とも相談して決めることにした。11月22日の話し合いの結果、12月20日の学習会をいつもより1時間早く始めて、学習は少し早めに終わらせて、みんな近くのお店へ行くことに決めたので、11月の学習会に出られなかった会員に、改めて12月の学習会に続く忘年会への参加をお願いすることにした。お店選びは会長と岡田さんにお任せした。こんな話が自然に出るのがうれしい。

* 予告

12月の例会(第37回) 2008年12月10日(水)

13:30~15:30、7階第1会議室

第21回学習会 2008年12月20日(土)

17:30~18:30

ヒューマンプラザ7階第1会議室、後忘年会

1月の例会(第38回) 2009年1月21日(水)

第1会議室

第22回学習会、2009年1月17日(土)

18:30~20:30

わたくしごと

漠然とながら、美しいものに心惹かれてきた。ならば、美しいものとは何か?心の優しさや暖かさ、毅然としながらも他者への配慮ができること。こうした魂の美しさは憧れていても、わたしには難しい。心がけたいと思いつつ、つい自己中心的になる。だからこそ、高潔な魂の持ち主に惚れるのである。

誰でも美しいものを好ましく思うだろう。何を美しく感じるかは、その人それぞれに異なるが、生き方全般にわたって自然に美しさを造り出していると思う。たとえば、わたしが住んでいるアパートは、1フロワ―19世帯の14階建てで、1階は図書館と、何世帯かの車いす使用者用の住宅になっており、2階以上全部同じ間取りになっているという。もちろんわたしは自分の住まい以外、他の一軒たりともどのように家具を置き、居住空間を作り出しているかは知らないが、たいいていの人は機能的にこざっぱりと生活し易いように配置していると思う。あるいは少し物を多く置いて、優美に優雅に部屋の空間を飾っている人もいるかもしれない。好みに応じて異なることが美しさの「追求」とまでは言わないまでも、個性が醸し出す美しさではないだろう。

わたしが美について気づかされたのは、高校に入ってからのことである。何と遅い目覚めだろうと、今にして思えば恥ずかしい。

ある曇り空の寒い冬の日であった。ラジオを聴いていると、男性評論家と女性の随筆家の対談であった。男性が言った。「わたしがあなたに初めてお会いしたのは、あなたが何かの理由で我が家へ訪問してくださいる約束をしましてね。ところがあいにく、わたしが外出していて、お約束の時間より遅れそうになりながら急いで帰ってきたのです。時間の約束は守る方なので、一層気になって帰ってきました。少し雪もよいの日でしてね、玄関に入ると桐の駒下駄が綺麗に揃えてあり、上がり框に紫色のショールが畳んで置いてありました。その下駄の鼻緒と、ショールの色と、畳み加減と、さらにいうなら、下駄とショールの距離感が見事で、足袋の白を併せて連想されて、〈今日のお客様は楚々として美しい女性に違いない〉と思ったのです。もちろん直感当たっていましたかね、あれほどのぐらい前のことでしたかねえ」としみじみ語っていました。

わたしはこの桐の下駄とショールの置き場所から白い足袋を連想し〈美しい〉と感じる感性の豊かさに、打ちのめされるほど驚いた。美を造り出すこととは感性を磨くことなのだと肝に銘じた。

そしてそのとき、わたしはある二つのことを思い出した。

だとしたら、あのことは？もつと子供の頃（小学3、4年）の、冬の8時過ぎの、夜空を寒さに震えながら、独り見つめていて、真つ暗な筈なのに、身も心も吸い込まれそうな、背中がぞくぞくし、恐ろしさに、もう空を見るのを止めようと思いつながら止められずに見入っていた、あの深い青い空はなんだったのだろう。泣きたくなるほど、いや確かにあの青、藍色だろうか？あの青を見るとき、何時も泣いていた。あの美しい青、今はもう思い出の中にしか無い色、深い深い藍色、表現しがたい濃く深く澄んだ青はやはり美しさなのだ。その美しさに我知らず感動していたのだ。

もう一つの思い出は、やはり同じ時期だった。あのころ、わたしはまだ少し明瞭な色を識別でき、大きな物体なら、近くにあることを認識できた。ただ、夜の暗さの中では物体をさえ認めることはできなかった。

その頃、近くの動物園へ遠足に連れて行ってもらったときのことである。山羊やウサギ、ガチョウ、七面鳥かな？とにかくそんな類の小動物を触らせてもらった。他に象の足と鼻も触り、象の背中は動物園のおじさんに抱いてもらって触った。ゴワゴワとした筈のようなもの、あるいは、太い縄で編んだようなものもあった。わたしよりもっと小さい子は象に乗せても

らい羨ましかった。その後園内を巡り歩き、クジャクの小屋へ行くとなんだか黒っぽい大きなものがあるのは分かったが、形全体は全く分からない。ところがそのクジャクが突然羽を広げたのである。赤や紫、青緑？ああ、もうどんな色が含まれていたかは分からないが、ただ驚くばかりの美しさで、大きくもあつた。思わずわたしは「わああー綺麗！」と叫んだ。すると引率の教師が「多恵子ちゃん、あれが見えるの？」と聞いた。もちろん詰問でも何でも無い、素直に「ああ、あれがこの子には見えるのだ」と思っただけだと思う。ところがわたしは「はい」と言っただけ口がきけなくなつてしまつた。友達のとんどがこの美しさを見られないのだと気付いたからである。このときもわたしは泣いてしまつた。教師は泣き出すわたしにまた驚いた。そして同僚の教師と話していた。「多恵子ちゃんはクジャクの羽を見て感動しているのよ」と。そう、間違えではない。わたしは二つながらの思いで泣いたのだつた。あの色とりどり（もしかしたらたくさんさんの色はないのかもしれない。がとにかく赤と、何とも言いがたい青緑（翡翠色？））の美しさは初めて見るものであり、感嘆していた。けれどもその美しさを伝えられないこと、一緒に喜べないことが悲しかった。何故泣いているのかと聞かれても、そんなことは言えない。自分だけ、この喜びを知つてしまつた申し

訳なさが、胸を締め付け泣きじやくり続けた。園内をさらに回つたが、もうそれ以上のことは分からなくなつた。ただわたしの泣きじやくりを止めてくれたのは、下級生の男の子の、「多恵子ちゃん泣いてる」とはやし立てられて恥ずかしくなつたからである。

わたしはラジオからのメッセーじに触発されて思ひ出したこの二つの美にまつわる思ひ出を、今まで以上に大切にしておこうと思つた。今既に視力を失つてゐるわたしは二度とあの色を見ることはないのだから、忘れてはならないと思つた。

そして平成の現在でも、あの深い青、藍色？は見てみたい。わたしの心にある美は、実際のそれとどう変わつてゐるか分からないし、もしかしたらわたしの心に残るこれらの色は、現実と違つてゐるのかもしれない。だが、わたしの表現力の乏しさはともかく、確かに「美しい」と感じたことは間違いない。

大人になつてから、「もし見えるようになったら何を見たい？」と聴かれて、即座にこの話をした。どうして何も明かりがないのに、空が青いのか分からない。と言うと、それは多分あなたが気付かない遠くに、あるいは下の方に明かりがあつたのでしょう。その明かりに照らしだされた色なのでしょう。と言われた。確かにわたしが立ちつくしていた所は山の上であつた。だから下の街の明かりが反射していたのだ。し

かもまだスモッグもない昭和30年前半のことなのだから、空気も澄んで本物だったのだ。それにしてもあの吸い込まれそうに綺麗な空、あれは確かに「悲しいまでに美しい」と表言したい美の極致だと思う。

一つ付け加えておきたいことがある。今現在のわたしは自分が見えないからこそ、側で誰かが「綺麗な紅葉！」とか、「裸木が美しい」と素直に言っていただくほうがうれしい。その言葉とその人の感動が伝わることによって、わたしは、わたしなりに自分勝手な「みごとさ」を想像して楽しんでいるのだから。

一方、日常生活の中でも、たとえばバス停で、駅のホームでじっと待っているときのたたずまいの美しさ、人とすれ違いながら、ふと詫びるときのにこやかさも美に繋がるだろう。また、人と人との心が引き合い通じ合うのも一つの美の形だ。

麗しいと書いてうつくしいと読むのを見つけた。古語における美しくは、現在の意味とは異なる。しかしやはり心地の良い言葉だとわたしは思っている。

秋篠寺の管長だった堀内瑞善の歌に

「人の世の美しかれと御仏は地にあれますか技芸天女と」

というのがあり、心惹かれるうたである。

2008年11月30日

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

20年度 第6回（第18回）報告

1 日時 平成20年9月20日（土）

18時30分～20時42分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 使用教材

「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回（全十回）」点字編、墨字編

レーズライター…栄…、労…、加…、

賀…、化…、花…、貨…、信…

5 学習会内容

（1） 前回の復習 テキスト第二回火を

3 複合文字 （1）

「固…」（レ下がり、ロ）字式は、□（くに構え）

▽古。「個…」（ナ、レ下がり）字式は、人+固。

「兄…」（レ、2・5の点）字式は、ロ・儿（ひとあし）。「見…」（メ、2・5の点）字式は、目・儿

（ひとあし）。「介…」（4・6の点（ひとやね）、

2・5の点）字式は、やね／儿（ひとあし）。

(2) 今回の学習内容 テキスト、漢数字

及び第一基本文字を部首とした文字 (3)

49 「先^ㇿ」 ツ (1・3・4・5の点) と 儿 (ひとあし、ただし、3・6の点) で表す。上の部分はノと土からなり、止めるからきたもので、足先が元の意味。音読みのセンは漢・呉音。字式は、土・儿 (ひとあし)。他の熟語は、「先生」「先般」「機先」「優先」「先輩」「先約」など多数ある。

* 時枝国語学 (時枝誠記国語学者) によると、日本語は詞 (シ・変らないもの) と辞 (ジ・変化するもの) の二種類で成り立つ。「花が咲く」という場合は「花」「咲」が詞、「が」「く」が辞となる。辞は、仮名でしか表せない。

50 「祝^ㇿ」 示偏 (1・2・3・4の点) と 儿 (ひとあし、2・5の点) で表す。口の部分は省略。兄が部首として含まれる文字。音読みのシユクは漢・呉音、シユウは漢音、シユとして呉音がある。字式は、ネ十兄。他の熟語に「祝意」「慶祝」「祝言^{しゅうげん}」「祝儀^{しゅうぎ}」などがある。

参考 「兌」兄の上に八を置いた文字。音読みのダは慣用音、タイは漢音、ダイは呉音。「悦」や「脱」の原字。穴から出るという意味があり、いわゆる兄とは異なる。2・5の点で表す。

* 兌が部首として含まれる文字二つ。

51 「説^ㇿ」 言偏 (エ・1・2・4の点) と 兌 (2・5の点) で表す。音読みのセツ・エツは漢音、セイは漢・呉音、セチ・エチは呉音。訓読のよろこぶ、よろこばしいは漢文で使われる。熟語に「説話」「説法」「説諭」「説教」「力説」「定説」「風説」「伝説」「仮説」「遊説^{ゆうぜい}」「説士^{ぜいし} (遊説の士)」「説服 (エツプク・喜んで服従する)」など多数ある。

52 「税^ㇿ」 禾偏 (ノ、2・3・4の点) と 兌 (2・5の点) で表す。音読みのゼイは慣用音、セイは漢音、セは呉音。熟語に「税収」「租税」「課税」「税関」「主税^{ちかち} (人名に使われる)」などがある。

* 見^ㇿを部首として含む文字二つ。

53 「覺^ㇿ」 ツメ冠 (3・6の点) と 見で表すが、儿の部分は省略。音読みのカクは漢・呉音。字式は、ツメ冠/見。熟語に「自覺」「不覺」「視覚」「聴覚」「臭覚」「味覚」「触覚」などがある。

54 「視^ㇿ」 示偏 (ネ・1・2・3・4の点) と 見で表すが、儿の部分は省略。音読みのシは漢音。字式は、ネ十見。訓読みの「みゝる」には他に「見」「觀」がある。熟語には「視察」「視界」「透視」「正視」「蔑視」「無視」などがある。

「みゝる」の見は自然に見えてくる、視は見ようと

思うという意思を持つ。

55 「界」介を部首とした文字で、田(1・3・5の点)と介(2・5の点、ひとやねの部分は省略)で表す。耕作地に境を付け、区画し離すという意味を持つ。音読みのカイは漢・呉音。熟語には「租界」「業界」「政界」「財界」「下界」「限界」「三界」「界線」「境界」「実業界」などがある。

20年度 第7回(第19回) 報告

1 日時 平成20年10月25日(土)

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者(省略)

4 使用教材

「漢点字講習用テキスト 初級編

第二回(全十回)」点字編、墨字編

レーズライター…恋、芸、会、

絵、伝、転、秋、畑、

5 学習会内容

(1) うか 羽化 第70号配布

(2) 前回の復習 テキスト第二回、

3 複合文字(1)

「先」顔の向いた方の先。過去・未来両方に

使われる。空間やベクトルがある。字式は、ノ土・儿(ひとあし)。「祝」字式は、ネ十見。示はお

供物を載せる台。「兌」上の部分はカタカナの

ソに似ていることから、字式は、ソ・兄。「説」

字式は、言偏十兌。「税」字式は、禾偏十兌。

「覚」字式は、ツメ(ツワ)冠/見。ツメ冠は両

の手で何かを行うという意味がある。「視」字式

は、ネ十見。「界」字式は、田・介

(3) 今回の学習内容 『漢数字及び第一基本

文字を部首とした文字(4)』

漢点字編 p94 墨字編 p38

* ツメ(ツワ)冠(3・6の点)の文字2つ。

56 「榮」ツメ冠と木(キ…1・2・6)で表

す。旧字は「榮」で、篝火を焚いている姿でこうこうと

篝火を焚けるのは豪族・権力者となり、さらに榮えに

ぎわうことからきている。音読みのエイは漢音、ヨウ

は呉音。熟語に「榮転」「榮誉」「光榮」「富榮」「虚

榮」、ヨウの使われ方として「榮西(エイサイとも)

日本臨済宗の祖、京都に建仁寺を建立、宋より茶種を

持ちこみ茶の栽培を広めた。「他の語として「弥榮」

「榮螺」がある。

57 「勞」ツメ冠と力(ヌ…1・3・4)で表

す。旧字は「勞」で、「力」は農具の耒(すき)から

きた。農業で困るのは自然災害と虫の害があり、社の前で焚火をたき米をあぶり祈りを捧げて農作業を行うことからきている。音読みのロウは漢・呉音。訓読みには「つかれる」「ねぎらう」と反対の意味に使われる。熟語には「労使」「労役」「慰労」「心労」「足労」などがある。

* 加とそれを含む文字。

58 「加^ㄐ」力(又…1・3・4の点)と口(ロ…1・2・4・5の点)で表す。力は来、口は神のお告げを聴く祝詞を入れる器(サイ)を指す。来と祈りで神に良いことが起こるように祈るという意味。音読みの力は漢音、ケは呉音。熟語に「加工」「加味」「加齢」「加担」「付加」「追加」「倍加」「添加」「増加」などがある。ケとしては「四度加行(密教における4種の修行。十八道法、金剛界法、胎藏界法、護摩法。)」がある。字式は、力十口

59 「賀^ㄐ」加(又…1・3・4の点)と貝(才下がり；3・5の点)で表す。貝は貨幣を意味し、価値の基準となる。音読みの力は漢音、ガは呉音。熟語に「賀正」「参賀」などと、地名・姓名に「伊賀」「甲賀」「浦賀」「横須賀」「賀川」「賀茂」「賀陽」などがある。字式は、加/貝。

* 化とそれを含む文字。

60 「化^ㄐ」第2人偏(4・6の点)と匕(4・5の点)で表す。常用字解では、人が死んで骨になるまでの変化(元は逆さまに横たわった二人の姿)とある。人間は自然界の理不尽(暴力)によって死に至り、死者は生存者の暴力になる。その害が及ばないようにするため、葬儀を行う。音読みの力は漢音、ケは呉音。熟語に「化工」「同化」「開化」「俗化」「沃化」「消化」「退化」、ケ・ゲとして「化身(けしん)」「権化(ごんげ)」などがある。字式は、人偏十匕。

61 「花^ㄐ」草冠(ク；1・4・6の点)と化で表すが、化の人偏の部分は省略。音読みの力は漢音、ケは呉音。熟語には「花卉」「花押」「花札」「花柳界」「開化」「造花」「梨花」「雄花」「雌花」としては「花香」「花籠」他の字として「紫陽花」としては「女郎花」「無花果」「金鳳花」「一花草」「花魁」「花車」など多数ある。字式は、草冠/化。

62 「貨^ㄐ」貝(才下がり、3・5の点)と化で表すが、化の人偏の部分は省略。貝は元はおかねで商品や財産といった豊かなことを表す。熟語には「百貨」「雜貨」「外貨」「良貨」「悪貨」「硬貨」「金貨」「銀貨」「銅貨」などがある。字式は、化/貝。

漢文のページ

長恨歌（6） 盛唐 白居易

此	天	在	在	夜	七	詞	臨
恨	長	レテハニ	レテハニ	半	月	中	別
綿	地	願	願	無	七	有	慇
綿	久	ハクハ	ハクハ	人	日	誓	懃
無	有	ニ	ニ	私	長	兩	重
盡	時	連	比	語	生	心	寄
期	盡	理	翼	時	殿	知	詞
-	-	枝	鳥	-	-	-	-

七言百一十句からなる長編の詩の最後の部分です。六回にわたり、「長恨歌」の抜粋を連載しました。

参照図書『遠藤哲夫「語法詳解 漢詩」（旺文社）』
 絵は『和漢三才図会』、『長恨歌絵巻』より

別（わか）れに臨（のぞ）みて慇懃（いんぎん）に重（かさ）ねて詞（ことば）を寄（よ）す

詞中（しちゅう）誓（ちか）い有り両（りやう）心（しん）のみ知る

七月（しちがつ）七日（にち）長（ちやう）生（せい）殿（でん）

夜（や）半（はん）人（ひと）無（な）く私（し）語（ご）の時（とき）

天（てん）に在（あ）りては願（ねが）わくは比翼（ひよく）の鳥（とり）と作（な）り

地（ち）に在（あ）りては願（ねが）わくは連理（れんり）の枝（えだ）と為（な）らんと

天長（てんちやう）地久（ぢきやう）時（とき）有（あ）りてか尽（つく）く

此（こ）の恨（うら）みは綿綿（めんめん）として尽（つく）くる期（き）無（な）からん

（楊貴妃を偲んで悲嘆にくれる日々を送る玄宗は、死者の霊を招き寄せることができるという道士に命じて、楊貴妃の魂を探させる。道士は天と地をかけめぐり、ついに人界を遠く離れた、仙人の住む山に、楊貴妃の魂をたずねあてた。）

楊貴妃は、道士との別れぎわに、玄宗への伝言をことづける。

それは、生前、七夕の夜に長生殿で帝とかわした、二人だけしか知らない誓いのことばだった。

「天上にあつては、比翼の鳥となり、地上にあつては、連理の枝となりたいたいものです。」

永遠のものと思われる天地もいつかは滅びる時がある。しかし、この悲恋の恨みはいつまでも続き、絶えることはないであろう。



臨 ミテ 別 ニ 慰 懃 ニ 重 ネテ 寄

ス 詞 フ

詞 中 有 リ 誓 兩 心 ノミ 知 ル

七月 七日長 生 殿

夜 半 無 ク 人私語 ノ 時



在 リテハ 天 ニ 願 ハクハ 作 リ 比

翼 ノ 鳥 ト

在 リテハ 地 ニ 願 ハクハ 爲 ラン

ト 連 理 ノ 枝 ト

天 長 地 久 有 リテカ 時 盡 ク

此 ノ 恨 ハ 綿 綿 トシテ 無 カラン

盡 クル 期



比翼の鳥＝比はならぶ意。雌雄それぞれ
一目一翼しかなく、身を寄せて
飛ぶという想像上の鳥。

連理の枝＝理は木目。二本の枝がくっつ
いて一本の枝になったもの。



漢点字講習用テキスト

初級編 第十二回

3 複合文字 (1)

4. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (5)

・「云☿☿」を含む文字。

(65) 芸☿☿ カイ ゲ
うえ - る わざ

「草☿☿」の下に「云☿☿」を置いた文字です。植物を育て栽培することを表す文字です。そこから、ものを作ること、その技術、さらにその作品という意味が生じました。漢点字では、「☿☿ (草冠)」と「☿☿ (云)」で表されます。

「芸術」「芸能」「芸人」「園芸」「演芸」「文芸」「一芸に秀でる」

(66) 会☿☿☿ カイ エ あ - う
あつ - まる あつ - める

三角屋根の下に「云☿☿」が置かれた形の文字です。人が顔をあわせる、人が集まって、力をあわせて仕事をするなどの意味があります。また、人が集まって形成する集合体も指します。漢点字では、「☿☿」で三角屋根を、「☿☿」で「云」を表します。

「会社」「会合」「会議」「会計」「社会」「協会」「一期一会」

・「会☿☿☿」を含む文字。

(67) 絵☿☿☿☿ カイ え えが - く

「糸偏」の右側に「会☿☿☿」を置いた形の文字です。「会☿☿☿」は、ものを寄せ集めるという意味があって、この文字は、糸を寄りあわせて、彩り豊かな刺繍を指します。そこから彩色された絵画、またそれを描くことを表すようになりました。漢点字では、「☿☿☿ (糸偏)」と「☿☿☿ (会)」で表されます。

「絵画」「絵の具」「絵本」「絵巻物」「絵解き」

* 以下の二つの文字は、墨字では「云☿☿☿」を部首としてい含んでいますが、これは本字に含まれている「專」の略体です。そこで漢点字では点字の符号に、「☿☿☿」ではなく、「☿☿☿」を採用しました。



(68) 伝_{三三} デン テン つた - える
つた - わる つた - う つたえ つて

墨字では、「人偏」の右側に「云_{三三}」を置いた形の文字です。この「云_{三三}」は、「專」の略体で、「專」は、「丸いもの」を表しています。丸いものゝころころと転がして、人から人へ手渡す様子を表している文字です。そこから、人から人へ、ものや情報が伝わる、昔から今へ、話しや習慣が伝わっているという意味に用いられます。漢点字では、「_三」（人偏）」と「_{三三}」（云）」で表されます。右側の点字の符号に、「云_{三三}」の「_三」でなく、「_{三三}」が用いられるのは、本字に従っているからです。

「伝言」「伝達」「伝説」「伝記」「伝統」「列伝」「駅伝」「以心伝心」「手伝い」「道伝い」「言伝」

(69) 転_{三三} テン ころ - ぶ
ころ - がる ころ - げる ころ - がす
まろ - ぶ うた - た

墨字では、「車偏」の右側に「云_{三三}」を置いた形の文字です。この「云_{三三}」は、「專」の略体で、「專」は、「丸いもの」を表しています。「車_三」とともに、丸いものがころころと転がる、転げる、転がすという意味を表します。時代が移る、人が変わる、ぐるっと一回りするという意味が含まれていて、「うたた」と読んで、移り易い様、加速する様、ものごとが悪い方へ進む様を表します。漢点字では、「_三」（偏）」と「_{三三}」（云）」で表されます。右側の点字の符号に、「云_{三三}」の「_三」でなく、「_{三三}」が用いられるのは、本字に従っているからです。

「転居」「転勤」「転校」「転移」「回転」「気が動転する」「七転び八起き」「転た寝」「転た心」

※ 「火_三」を部首として含む文字。

(70) 秋_{三三} シュウ あき とき

「ノ木偏」の右側に「火_三」を置いた文字です。本字では旁に「亀」が入っていて、火で亀をあぶることを表していますが、通常は省略されます。「ノ木偏」は、作物の豊かな実りを表すもので、この文字は、収穫の季節の秋を表しています。また、「とき」と読んで、大切なその時の意味にも用います。漢点字では、「_三」（ノ木偏）」と「_{三三}」（火）」で表されます。

「秋月」「秋天」「秋光」「春夏秋冬」「白秋」「秋の長雨」

「報告とご案内」

一 完成、漢点字版『常用字解』（前半）

本年・二〇〇八年の完成を目指して漢点字訳に取り組んで参りました『常用字解』（白川静著、平凡社、二〇〇三年版）の前半・十巻のファイルが完成し、年内に打ち出し、年明け早々には製本を終える目処が立ちました。製本を完了し次第、横浜市中央図書館に納入する予定です。

後半は来年度秋を目標に、最終作業に当たります。

①概要・漢点字版『常用字解』は、同書活字版を全訳するものです。今回は一〇十巻、「垂」〳「籍」までを収録しました。来年度納入分は十一〳十九巻で、「切」〳「腕」と、「漢点字版凡例」を収録する予定です。

『常用字解』は、白川先生の半生をかけた力作『字統』、『字訓』、『字通』の三部作を、一般向けにまとめられた書物です。従って「常用漢字」を解説した体裁を採っておられますが、実際は漢字文化全般に渡った解説書です。その意味で視覚障害者には、これまでに手にできなかった種類の書籍と言えます。十二年

前に完成した『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）とともに、漢字文化に開かれた二つ目の窓と言えます。

原本には、甲骨文・金文等、図示や写真が多く収録されています。しかし残念ながらそのままの形で漢点字訳することはできませんでした。できる限り言葉に置き換えるよう努力致しましたが、割愛せざるを得ないものも多数ありました。同様に著者の白川先生は、「口」の字形の由来を、祝詞を入れる器であること、それが「サイ」と呼ばれることを論証され、その原形をお示しになっておられます。これも漢点字版では、その形を表すことができません。「漢点字版凡例」に図の説明を入れましたので、ご精読下さい。

②漢点字版の特徴・第十九巻の「漢点字版凡例」に詳述致しますが、原本を忠実に漢点字訳するばかりでなく、触読の便宜をはかる意味で、何点か付記、変更あるいは割愛を致しました。

a. 字式・漢点字は点字ですので、そのままでは墨字の文字全体を表現できません。そこで故・川上泰一先生のご提案である「字式」を用いて、字形を示すことに致しました。

川上先生は漢字の構成を、幾つかのパーツによる組

み立てと捉えられました。そのパーツの位置関係を、数学記号で表すのが「字式」です。横の関係を「+」、縦の関係を「/」で示します。これに加えて本会では、中に含む関係を「>」、縦にくつつく関係を「・」、中に割り込む関係を「⊂」で表すことに致しました。

字式の例

「哀」:	衣	÷	口
「愛」:	ノ	ツ	冠 / 心 / 文
「圧」:	厂	>	土
「壓」:	厭	>	土
(厭:	厂	>	“日 / 月 + 犬”)

(字式の表記法の詳細は、「漢点字版凡例」をご覧ください。)

b. サイ…原本には祝詞を入れる器が図示されていますが、漢点字版では、「【さい】」と表記することですしました。

c. 図、写真…本文中の図は、可能な限り「」に括って、説明文を入れました。甲骨文・金文の字形も、でき得る限り「」中に説明文を入れましたが、一部は割愛せざるを得ませんでした。本文の外の図および写真は、タイトルだけ示しました。

③ 配本…横浜市中央図書館への納本後、皆様のご要望にお応え致します。費用等は実費の予定です。また、漢点字の電子データであるEIBファイルでのご提供も予定しております。
ご要望をお寄せ下さい。

二 『生麦事件』

吉村昭著、『生麦事件 上下巻』（新潮文庫）の漢点字訳が完成致しました。ご希望の方には、既にお送り致しました。引き続きご希望を募集しております。お申し出下さい。

三 本誌のDAISY化について

先にもご案内申し上げましたように、本誌の音訳版は、七三号よりテープ版からDAISY版への移行を予定しております。引き続きテープ版をご希望の方は、至急お申し出下さい。

編集後記

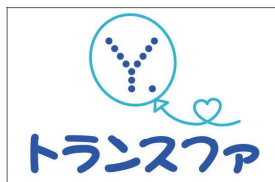
▼「ご案内」にありますように、漢点字版『常用字解』の前半・十巻のファイルが完成しました。打ち出しは既に完了しており、年明け早々には製本を終える予定ですが、この作業はすべて手間のかかる手作業で、数人の会員の皆さんにお集まりいただき共同で行います。一枚一枚の点字用紙の端を一センチばかり折り曲げて、それをのり付けするわけです▼一つ一つの工程はそれほど複雑なものではありませんが、慣れないとなかなかきれいに揃った本の形になりません。そして、皆さんに分担していただくのはここまで。最終的に表紙をつけ、ラベルを貼って仕上げるのは、万が一失敗すると最初からやり直しということになって大変なものと、それを恐れて誰もやろうといってくれる人がいないので、私の一人作業になってしまいます▼こうして毎年何冊かの漢点字本を横浜市中央図書館に納入してきました。最初に挑戦した『漢字源』は、なんと全90巻、よくやったものだと、10年以上前の作業を懐かしく思い出します。それに比べたら10冊そこそこの作業は大したことはないと自分自身に言い聞かせながら、やろうとしているところです。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象者は、横浜市在住・在宅の、重度障害者（視覚・肢体・知的）です。

常時募集・ガイドヘルパー： ホームヘルパー2級以上の有資格者。
障害者の外出支援をお願いします。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》

今回の発行は1月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。